

秋田港



秋田県建設部港湾空港課

〒010-8570 秋田市山王4-1-1

☎018-860-2541

URL : <http://www.pref.akita.lg.jp/>

1. 概況

<沿革>

秋田港は県内最大河川である雄物川の河口に発達した港である。港として本格的に発展したのは慶長7年関ヶ原の戦い以後で、佐竹義宣が水戸より移封されてからは土崎湊と称し、沿岸地方との物資集散の要港として、北国7港（三国、七尾、岩瀬、新潟、酒田、秋田、津軽）のひとつに数えられ、500石内外の入港船で賑わっていた。

しかし、明治に入り、季節風と流砂の堆積等を原因とする河口埋塞が顕著となり、汽船の入港や海運界の進展のなか、その対策が急を要するようになった。そこで、明治17年には、内務省の土木技師である古市公威博士により、河心の変化及び陸地の崩壊を防止すべく、波止場の設計がなされ、同18年に完成した。それ以来、出入船舶は益々にぎわいを加え、大阪、神戸及び東京方面への定期航路が開設され、明治43年港湾調査会において第2種重要港湾に指定されるに至った。

一方、河口港のため、標砂の堆積や河心の移動に悩まされ続けてきた雄物川は、大正6年から分流のための改修工事が実施された。画期的な勝平山の開削工事が実に22年の長い年月をかけて行われ、昭和13年に完成をみた。これにより、河口港ゆえの不安を解消するとともに、開削土砂を旧雄物川河口の一部に埋め立て、現在の茨島工業地帯70万坪を造成した。

この間の昭和16年、土崎町が秋田市に合併し、「秋田港」と改称し、同28年7月、秋田県が港湾管理者となった。昭和40年、秋田湾地区が新産業都市の指定を受けたことによって港の建設は急ピッチで進められ、同43年には大浜掘込港湾工事に着手し、同45年に開港した。この掘込港湾を主とした施設の整備に伴い、向浜地区、大浜地区の背後地には、相次いで企業が進出、主力企業として亜鉛精錬所、火力発電所、製紙工場、木材関連工業等の立地を見るに至り、港勢は著しく活発となった。

平成24年4月に新国際コンテナターミナルが供用開始し、更に平成27年1月に2期計画部分が供用開始し、年間処理能力は10万TEUとなっている。また、平成7年11月に開設された国際コンテナ航路は、現在5航路（韓国便5〔定期〕うち2便が中国へ延伸）となっている。一方、平成11年1月にはフェリーが就航し、苫小牧、新潟、敦賀と結ばれた。

<県都秋田市を背後に>

本港は県都秋田市を背後に、北上して八郎潟干拓地（大潟村）、男鹿国定公園を見ながら遠浅の単調な湾曲部にあり、秋田県の中心部北緯39度45分26秒、東経140度02分51秒に位置し、県南部（宮城・岩手県境）に源を発して日本海に注ぐ一級河川雄物川の旧河口にある。

秋田市は、1200余年前の天平5年（733年）、大和朝廷が北辺守備の拠点として現市内の清水の丘に出羽柵（でわのさく）を設置したことに始まる。その後、今日の秋田市の基礎がつけられたのは、江戸時代水戸より移封されてきた佐竹義宣公によってである。以来、明治22年に市制が施行された後、9回にわたる周辺町村との合併を経て現在に至っている。

同市は、秋田県の人口の約31%、製造品出荷額の約25%を占め、平成9年には中核市となり、地方分権を推進し、市政への市民参加を進めた、市民主体のまちづくりを目指している。

<厳しい自然条件>

本港は、日本海側特有の気象海象が見られ、春から秋にかけては南東寄りの風が多く、秋の台風の影響を除けば比較的温和であるが、晩秋から冬期にかけては、西高東低の気圧配置の影響で北西の季節風が多い。このため、北西～北方向に高い波浪が発生する。

<恵まれた自然環境とさらなる環境整備>

厳しい自然条件と向き合う一方、本港は恵まれた自然環境の中にある。中でも向浜地区では、豊かな緑地を活用した公園が整備され、周辺のスポーツゾーンと相まって、県民のレクリエーションゾーンとして幅広く利用されている。

また、飯島地区では、近年の余暇時間の増加に対応する海洋性レクリエーションゾーンとして、「秋田マリナ」が平成7年に、港湾緑地（飯島サンセットパーク）が平成14年にそれぞれ完成している。

そのほか本港においては、海とまちが一体となった再開発を図るため、ポータルネッサンス21計画が策定され、「ポートタワー・セリオン」や「セリオン・リスタ」（全天候型覆い付緑地）が整備されている。

<貨物取扱量は793万トン>

本港は主な係留施設として、5万トン岸壁1バースを始めとして、4万トン岸壁1バース、3万トン岸壁1バース、1万5千トン岸壁8バース、1万トン岸壁1バース、5千トン岸壁5バース等の公共岸壁のほか東北電力㈱の7万1千トンドルフィン等を有しており、現在は平成18年2月の交通政策審議会第17回港湾分科会の議を経た港湾計画に基づいて整備を行っている。平成25年の港湾取扱貨物量は、石油製品、重油、木材チップ及びセメント等を主要貨物として、外貿292万トン、内貿578万トン合計870万トンに達している。

<これからの秋田港>

今後の整備方針としては、秋田港の地理的優位性を活用し、東北地方の広域物流拠点港湾としてコンテナターミナル等の更なる機能拡充を図るほか、更なる港内静穏度向上のための防波堤整備を推進する必要がある。